

一般社団法人日本映像民俗学の会第 41 回二風谷大会特集テーマ アイヌと北方文化上映作品要旨  
**ムックリの響き** - 伝統と創造の過去 現在 未来 -  
45 分 1999/2018 年 東京シネマ新社・日本口琴協会共同製作・著作

1999 年 2 月 7 日、日本口琴協会はアイヌ文化振興・研究推進機構(現在のアイヌ民族文化財団)の助成を受けて、東京、青山円形劇場で、「ムックリの響き」コンサートを開催した。北海道各地のムックリ奏者であるアイヌ女性 7 名が、このコンサートに参加した。彼女たちは、それまでの国際口琴大会(第 2 回サハ 1991、第 3 回オーストリア 1998)への参加者であった。このコンサートには、日本各地の金属口琴奏者たちも賛助出演し、また観客全員にもムックリが配られ、ワークショップが行われるなど充実した催しであった。そのコンサートを日本口琴協会と東京シネマ新社は、2 台のビデオカメラで収録したが、いろいろな事情が重なり、作品化の機会を逸していた。日本映像民俗学の会第 41 回研究大会が、北海道二風谷で会されるにあたり、99 年収録の映像を再検討し、その後の 20 年間にどのような進化をアイヌのムックリ演奏が経験したかを 99 年コンサート参加者 2 名のインタビューと新しい世代の演奏、さらにムックリ製作の様子をも追加し、作品化した。

旧ソ連の崩壊は、シベリア、極東に文化的に劇的な変化をもたらした。それまで閉ざされてきた広大な地域が、外部世界からアクセスが自由になり、人々の交流が再開された。その流れの中 1991 年、ロシア連邦サハ共和国で第 2 回世界口琴大会が催されると、ほぼ世界中の口琴演奏の世界に大変化が起きた。日本口琴協会にも、この大会に参加したアイヌ女性たちにも、それは衝撃的な出来事であった。それまでと、それ以降では、意識の上でも、手法の上でも大きな違いが生じたことが、舞台上のスピーチから見て取れる。

現代の北海道のアイヌ民族のムックリといえば竹製の口琴が主流なのは言うまでもないことだが、過去には、鉄製の金属口琴、カニムックリが存在した。また、埼玉県から平安時代の鉄製口琴 3 本が出土しており、さらに、江戸時代には津軽やいわきなどで鉄製の口琴が演奏されていたこと、文政期には、金属口琴「びやぼん」が大流行し、幕府に禁じられたことが、滝沢馬琴らによって記録されている。アイヌのムックリ奏者たちを迎えて賛助出演した和人の口琴奏者たちは、金属口琴を演奏しているが、主催者の意図は、こうした過去を踏まえてのものである。追加インタビューの中では、幼時にカニムックリを実見した証言があるが、アイヌのカニムックリの命脈が尽きたとは言い切れないのでは無かろうか？

サハの金属口琴ホムスの奏法の中に演奏中にカッコウの鳴き声を模倣するものがある。主催者の直川礼緒が、それを行っているが、ムックリ奏者たちも、数名の奏者たちが、それぞれが工夫して編み出したカッコウの鳴き声を披露している。ムックリの伝統的な奏法としては見られなかったものであるが、いずれも、北海道の自然とサハの金属口琴の奏法に刺激されて自らのものにしたのだ。かつてアイヌ民族が和人とだけではなく、サハリンやアムール河口部など周辺の北方民族と自由に交流していた時代があり、その中でアイヌの民族文化が豊かなものになっただけでなく、中国と日本の文物交流の仲介者として、大きな役割を担っていた。アイヌの民族文化は常に新陳代謝を繰り返すダイナミックなものであった。ムックリの響きの中から、そうしたアイヌ民族文化の特質を感じとっていただければ幸いである。

## ムックリ奏者たち

1999年2月7日の青山円形劇場でのコンサート「ムックリの響き」では、アイヌ女性たちは基本的に年齢の若い順により年長者へと演奏した。このビデオ作品では構成の関係で演奏順は、年齢の順にはなっていない。ここでは作品上の登場順に列記させていただく。

弟子シギ子(阿寒)、堀悦子(浦河)、床みどり(阿寒)、今井ノリ子(屈斜路)、山本栄子(阿寒)、磯嶋恵美子(塘路)、遠山サキ(浦河)。

ムックリ製作：鈴木紀美代(釧路)

2018年追撮 インタビュー：山本栄子(阿寒)、床みどり(阿寒) ムックリ演奏：郷右近富貴子(阿寒)

## 賛助出演

巻上公一(超歌唱家) ハンガリーの口琴ドロンプ、直川礼緒(日本口琴協会) サハの口琴ホムス、朝比奈尚行(時々自動) 3連口琴による「夜汽車のブルース」 作詞・作曲：シバ

資料提供：国立民族学博物館 秋田県立博物館

## スタッフ

撮影 コンサート：谷口常也・草間道則 撮影サポート：岡田一男・鈴木由紀 ムックリ製作：直川礼緒

補足撮影：谷口常也・直川礼緒

構成・編集：直川礼緒・岡田一男

## 日本口琴協会と直川礼緒

日本口琴協会は、直川礼緒を代表として、1990年12月に口琴文化の振興を目指して設立された。世界に点在するユニークな楽器「口琴」に関する情報の収集と発信を行うと同時に、口琴を通じての交流活動を行っている。ロシア連邦サハ共和国に本部を置く、国際口琴協会の日本支部として口琴を巡る国際交流の窓口となっている。

直川礼緒(1959年、金沢生まれ)は、子ども時代から音を出すもの全てに興味があったというが、早稲田大学第2文学部演劇科在学中に東アフリカを旅して出会った親指ピアノ、イリンバについて卒論をまとめると、それが指導教官だった小島美子の推薦で東洋音楽学会誌に掲載され、注目された。その後80年代には、インドネシアの音楽、とくにガムラン演奏を学ぶが、口琴にも出会い、次第に関心を集中して1990年の日本口琴協会設立に至る。直川の出発点は、アイヌのムックリと南方系の口琴との類似点と相違点にあるが、北方ユーラシアの口琴に広く関心を広げるきっかけは、翌91年崩壊直前の旧ソ連、ヤクート＝サハ共和国で開催された第2回国際口琴大会への参加であった。直川は、当時の協会員全員に参加を呼び掛けたが、手を挙げたのは、この作品に出演している道東のアイヌ女性3名だけだった。しかし直川にとっても、アイヌ女性たちにとっても、サハ体験は衝撃的な出来事だった。直川は、サハを基点に一気に北方ユーラシア全域の口琴奏者、口琴製作者と交流の輪を広げた。1998年に第3回国際口琴大会が、オーストリアのモルンで開催されるにあたっては7名のムックリ奏者の参加へと広がり、以後も次々とアイヌ女性たちが、海外の口琴イベントに参加するようになった。

東京シネマ新社の岡田とは1992年に札幌で当時、北海道教育大学学長だった音楽民族学者、谷本一之主宰の北方諸民族芸能祭で初めて出会った。以来、「サハの口琴ホムスの教則」ビデオなどの映像制作と北方・ユーラシア地域との文化交流を巡って、共同作業を続けてきた。